

INTERVIEW

山口県立総合医療センター
へき地医療支援センター センター長
原田昌範先生



山口県のへき地医療のために、 良い仕組みをつくりたい。

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

山口県に残るという選択

山田隆司(聞き手) 今日山口県立総合医療センターに原田昌範先生をお訪ねしました。

原田先生には地域医療振興協会の山口県支部長という立場で、卒業生のとりまとめ役をお願いしています。恒例ですので、自治医科大学を卒業して現在に至るまでの経緯を紹介していただけますか。

原田昌範 山口県では自治医大の卒業生は全員、県立総合医療センターで初期研修を行います。私は2年目に外科の研修をしました。3年目からは50床で医師5人という、山間部の岩国市立錦中央病院で内科を担当しました。6年目にまた当院に戻り1年間外科のトレーニング。その後周南市国民健康保険鹿野診療所に先輩の永島 浩先生のもとに2年間派遣されました。たまたま

ですが、へき地に暮らす自分の祖父の主治医になりました。そこは父親の故郷だったのですね。赴任してちょうど1年くらい経ったころ、在宅で祖父を看取するという経験をしました。それまでも在宅医療には関わっていましたが、そのときは医師としてだけではなく患者の側も経験したわけで、看護師、訪問看護師、ケアマネなど、さまざまな医療資源がないと、在宅医療は難しいということを実感しました。

山田 その診療所に赴任するまでは外科研修が主体だったわけですよね。診療所では外科の選択はなくなるわけですが、抵抗はありませんでしたか。

原田 2週間に一度研修日を設けていただいていたので、それを利用して外科の手術は続けていました。自分は地元の山口大学と自治医大の両方

に願書を出しました。自治医大の方に合格した時、父から「それはやはりそういうこと(地域医療、総合医)をやれということなのだ」と言われたことは、今思うとへき地医療に取り組む覚悟だったり、支えになっていたと思います。トレーニングすると外科にも魅力があって義務明けのことについて迷いながら9年間を過ごしましたが、自分の祖父の死に立ち会って、やはりへき地医療の大事さ、総合医の重要性というものを再認識するきっかけになりましたね。

義務の最後の1年間は離島の萩市大島診療所という一人診療所へ赴任しました。ここは人口約900人の島でしたが、毎日が楽しくて面白かったですね。

卒後9年目に県から「ドクタープール制度(5年)」を提案されました。山口県では義務終了者が県内に定着しにくいという状況が続いていたため、ドクタープール制度をつくったのです。私はそれを利用して大島診療所に1年残り、その後自治医大の地域医療学センターに1年間行き、残りの3年間は県立総合医療センターの地域医療部でへき地を支援するという仕事をいただきました。9年目のときには義務明けにドクタープール制度か外科か、どちらを選択するか悩みましたが、祖父を看取った経験もありましたし、へき地医療をもっといいものにしていきたいと思い、ドクタープール制度を選びました。そして現在に至っています。

言葉の意味を改めて考えた

原田 ドクタープール制度は私が第1号で、実はその後第2号がないのです。ちょっと残念なのですが。

山田 ドクタープールという言葉は各県で使われているようですが、なかなか医師が集まらず、実質機能しているところは少ないと思います。山口県ではそういう枠組みによって先生が県にとどまったのは素晴らしいですね。1年間は自治医大の地域医療学センターに行かれたのですね。

原田 自分としては将来的に総合医を目指していましたので、自治医大の「地域医療後期研修プログラムアドバンストコース」にエントリーしました。プログラムの中の選択で、総合診療が進んでいるさまざまな地域の視察ができたことが大きかったですね。

山田 卒業生はいろいろな地域で、それぞれ質の高い地域医療を展開して貢献していますが、横断的に行き来するチャンスは案外少ないのですね。

でも外から見ることでそれぞれに共通する地域医療、総合診療の真価のようなもの、自分のやっていることの価値を確認できる場所があるはずです。その視察を通してさまざまな地域を実際に見て、地域の先生たちと繋がりを持たれたことは、今、先生が県で卒業生のまとめ役をされる下地になったのではないかという気がします。

原田 自分はそれまで島民900人の離島にいたわけですが、そこから1,000床を超える大学病院に移って、同じ「総合診療」という言葉でも場所によってこうも違うのだということに気付きました。自分がそれまで経験してきた総合診療はどちらかという和家庭医寄りで、病院総合医の経験は少なかったと痛感し、しばらくは太刀打ちできないという感じでした。母校で「総合診療」という言葉の曖昧さを感じると同時に「地域医療」という言葉についても改めて考えました。このとき、公衆衛生学の調査で、タイトルに「地域医